

# 人を助ける仕事

## 江川紹子



連載 ⑩

三十歳という年齢を、人生の一つの節目と感じる女性は少なくないらしい。長谷川英子もその一人。この歳を目標に転職を考え、鍼灸師となった。さらにアロマセラピーを学び、かつての自分と同じように心も体も疲れ、生き方に迷っている女性たちを癒している。その彼女は、今また第二の節目を迎えている。

男の子と一緒に木登りをしたり、泥まみれで遊ぶのが大好きな、活発な子どもだった。中学生の時はソフトボール部のピッチャーとして活躍。先生に勧められるまま、偏差値が高い女子高に進学したが、女の子ばかりずらっと並ぶ入学式を見て、「私の来る世界

じゃなかった」と悔やんだ。

鬱々とした毎日。その反動か、「バンカラで泥臭い感じ」に憧れて、明治大学に進学し、少林寺拳法部に入った。

テレビ番組で女子大生が盛んにもてはやされた時期。長谷川は「そういうのと一緒にしないで」と、硬派を気取った。始めるとトコトンのめり込むタイプ。練習にも熱心で、卒業までに三段の資格を取った。

教師だった母親の影響もあり、自分も学校の先生になるものだと、子どもの頃から思っていた。だが、早起きが大学の苦手の長谷川は、二週間の教育実習で「一時間目から授業をやる生活なんてできな

い」と実感し、進路変更。「将来も食いつぶされることはないだろう」と、外資系のコンピュータ会社に就職した。

システム・エンジニアとして研修を受けた。銀行のシステムのプログラムの変更とそれに伴う調査や交渉が主な仕事。文科系の学部出身でこの仕事で活躍している人は少なくない。しかし長谷川は……

「難しかった。コンピュータの世界は、〇か一か。必ず原因があって結果がある。『私はこう思う』という感覚では通じない世界なんですわね」

一つの仕事をこなすのに、同僚より時間がかかった。失敗もあった。優秀な先輩と組めば、重要な仕事はほとんど

その人に任せることになり、そうなれば長谷川はただ居るだけの存在になってしまう。劣等感や虚しさに加え、「こんなことでお金をもらって申し訳ない」と情けなかった。同期が何らかの成果を出せば、焦りも感じた。

給料のほどを、カラオケと社会人になって始めたトライアスロンに注ぎ込んだ。目標に向かって努力をすることが好きなので、特にトライアスロンには熱中した。疲れた体のまま仕事をする事になり、やる気も能率もさらに低下。気分転換のはずが、逆効果だった。

「他に、もっと私に向いている仕事があるんじゃないか」——そんな気持ちで膨らんだ。目の前の三十歳という年齢を意識した。「仕事を変えるなら今だ」と思う一方、何をしたらいいかわからなかった。

弱みを見せたくなくて、同期社員には相談できなかった。母親からは、「せっかくだ大きな会社に入ったんだから、辞めるのはもったいない。頑張りなさい」と激励された。親の心配は理解できたが、「やっぱり違う」という思いは募った。

そんな時、高収入を見込める仕事の特集した女性雑誌を見た。鍼灸師も紹介されていた。少林寺拳法でツボについて勉強した頃から東洋医学に興味はあり、収入がよさそうなのも魅力だった。会社を辞め、専門学校に入った。

勉強をしながら、夜はビジネスホテルでマッサージのアルバイトをした。その頃の長谷川は、大手企業社員の頃のプライドを引きずった「なんとなく偉そうなマッサージ師」だったらしい。

お客は、マッサージもさる

鍼灸師、アロマセラピスト・長谷川英子

体だけではなく、心を元気にするために



ことながら、長谷川と話をした。中には、「揉むのはいいから話をしようよ」と言ってくる客もいた。長谷川は、それがイヤだった。「私はマッサージをしに来たのであって、あなたと話をしに来たのではありません」という態度でした。とにかくなるべく多くの人を揉んで勉強したい、データを集めたい、というだけだったんです。

## ただ漫然と話をするのはなく 元気になるきっかけを示したい

川も素直にうれしきを感じた。そして、次第に仕事に対する考え方が変わってきた。「本当に楽しんであげるためには、治療技術は五〇パーセントなんです。もっと相手のことを理解しようという気持ちを持ってないと、技術がい

くらうまくいってもダメだな、と。それにこの仕事は、私を中心ではなくて、患者さんが主役。当たり前のことなんですけれど、実際にやってみるまで分らなかった。お客さんに鍛えられて、自分が謙虚になれたと思う」

学校を卒業して、薬剤師でもある女性の鍼灸師が経営している都内の鍼灸院に助手として就職。その鍼灸師は、相手の心の状態を読み取って、ズバツと的確なアドバイスをしてきた。時には、重病の患者に対して「そんなことであなたは生きられると思ってるのっ」とハツパをかけることもあった。患者がシャキッとして帰っていくのを目の当たりにして、長谷川に新たな目標が見えてきた。

「ただ漫然と話をするんじゃない、人が元気になるきっかけを示してあげられる存在になりたい」

ただ、その女性鍼灸師のよくな迫力で押すやり方は、パワフルな人だからこそできるものであって、自分には別

のやり方があるのではないかと、という気がした。

その後、他の鍼灸院で働いたり、整体、スポーツマッサージなども学んだ。

「鍼灸だけで全て治せる自信はまだなくて、いろいろな引き出しを持っていかかった」

治療法は数限りなくあり、結局は自分なりの方法、長谷川式の治療法を作るしかなく、そうだった。「体だけでなく、心にもアプローチできる方法はないかな」と探している過程で、香りを含んだ精油を体に塗って心身に働きかけるアロマセラピーを知った。高校生の時にポプリ作りに凝ったこともあつた。夢中で勉強し、そのうち教わる側から教える立場になつていった。

アロマを教わりにくる人、鍼灸の患者の中には、長谷川がコンピュータ会社で閑々としていた頃の自分によく似た状況の三十歳を前にしたOLたちがかなりいた。彼女たちに、長谷川は自分の体験を話す。ただ、アドバイスや指導は、自分の人生を考えるのには、エネルギーが必要で、それを取り戻すことが大事だと思ふんです。そのためにも一瞬でも幸せな気持ちになれたらいいし、できればその幸せな時間が長く続くといい」

心身共にくたびれきつていた女性が、鍼灸治療をしているうちに体力を回復。仕事効率率よくできるようになって、冷静に考えられるようになり、自分が実はその仕事に向いてない分って、別の世界に転身した。あるいは逆に、今の職場の中で自分のやりたいことを見つけようと思ふようになった。母が自分を産んだこの歳を、長谷川は第二の節目と思つてきた。その年齢を迎え、今年三月、都内にトリートメントルームを開業。

「この歳までに結婚して子どもが産めたらいいな、なんて思つてましたけど、仕事の方になつちやいました(笑)」

そこで行われる長谷川式治療法とは？

「鍼灸もアロマもやって、話もする。何々式という枠にはめられない、心も体も統合的にケアできればいいな、と」

一人ひとりじっくり向き合う今のやり方では、雑誌で紹介されていたような高収入は夢のまた夢。会社員時代よりずっと収入は低いのが現状だ。だが、今の長谷川には別に大きな夢がある。

「ハワイに店を作ることで。気が好きだし、人がやさしくなれる不思議な力がその土地にあるような気がして。そういう所で治療ができたら、いいな」

- 1966 群馬県で生まれる
- 1989 明治大学卒業。IBMに就職
- 1993 IBM退社
- 1997 日本鍼灸理療専門学校卒業。鍼灸師として働き始める
- 1998 メディカル・アロマセラピーと出会う
- 2003 都内にトリートメントルーム「LUNAホリスティックケア」を開く